

消えゆくアラル海を訪ねて

2004年、ウズベキスタンと、年々縮小しつつあるアラル海を巡検するという機会を得た。

ウズベキスタンの首都タシケントまでは、成田からの直行便ではなく、ソウル経由のアシアナ航空で入った。到着は、日本時間で深夜になったうえ、社会主義時代の名残からか、入国にかなりの時間を要した。結局ホテルに着いたのは、現地時間でも深夜になり、初日から寝不足気味になった。

翌朝、この旅の現地ガイドであるバフチオール氏と合流し、いよいよアラル海を目指しての旅が始まった。バフチオール氏は、現地の大学の日本語学部に所属する大学院生であり、研修で福岡に来日したこともある親日家である。

タシケントは、首都だけあって人口も多く、インフラも整備されており、日本と同じような生活ができる環境であった。ホテルでは、日本の衛星放送も見ることができた。街中には、韓国製品がよく見受けられた。自動車や電化製品で新しいものは、ほとんどが韓国製であった。私たちが移動に使った大型バスは、オランダ製であったが、外国人向けにしか使用されない様子であった。このバスでほぼ全行程を移動するという旅で、首都タシケントからサマルカンド、ブハラ、ヒヴァ、ヌクスと、アムダリア上流からウラル海へと下っていった。バスを走らせていくと、いたるところで綿花畑が広がっていたが、田舎に行くほど灌漑の設備が悪くなり、綿花の質もそれに比例するようであった。田舎では、ただ地面を掘っただけのような灌漑設備もあり、このようなところでは水の蒸発が激しいため、より多くの水を川から取水しなければならなくなっている。灌漑設備が悪くなるほど大量の水が必要になり、ますますアムダリアの水が減少するという悪循環が起きている様子であった。

もう一つ、大きな問題がみられた。それは綿花の単作による塩害である。もともと肥沃な土地でないところに作付けしているため、数年経つと地中から塩が吹き出してくる。この塩を洗い流すためにさらに多量の灌漑水を使う。元々この地には、綿花畑は存在しなかった。冷戦時代、西側諸国より綿花が入りにくくなったため、ソ連の政策で栽培を始めたという経緯がある。



写真1 灌漑水路で遊ぶ子どもたち

アラル海にたどりついたのは、旅の八日目のことであった。アラル海の水際を目指して、ヌクスを出発したのはまだ真夜中といってもよい時間である。途中かつての港町であったモイナックまでは、大型バスで行けたが、そこから先は、ソ連時代の四輪駆動車に分乗しての旅となった。モイナックから水際までは約 200 km もあり、しかもほとんど道無き道を進むため、かなりの時間を要した。かつて湖底だったところを走るため当然のことながら乗り心地も悪く、お尻が痛くなるので定期的に席替えを行い、不公平がないようにした。また、走っている間は、砂埃にも悩まされた。ソ連時代の四輪駆動車には、冷房装置がなく、窓を開けて走らなくてはならない。そのような状況で、ほとんど雨の降らない乾ききった大地を走行するため、砂埃を容赦なくあびた。何度か休憩のために車を止め、外に出てみたが、大地には、貝の死骸が無数にころがっており、かつてここが、湖底だったことを実感することができた。走ること数時間、ようやくアラル海が見えてきた時は、一同ほっとした様子であった。はじめにアラル海を見たとき、水平線が見え大きな湖というより海のように思えた。見えてきたといっても、水際まではそれなりの距離があり、実際たどり着くまでには、少々時間が掛かった。



写真2 アラル海と干上がった昔の湖面

念願の水際にたどり着いたのは、すでにお昼に近かった。しばらく各自思い思いに、行動していた。水際で写真やビデオを撮ったり、靴を脱いで湖に入ったり、湖水をなめてみたりと存分にアラル海を堪能した。湖水をなめてみたが、それほどしょっぱいとは感じなかった。しかし塩分濃度が普通の湖よりかなり高いことは、魚が住めない状況からも判断できた。かつては、豊富な魚を求めての漁業が営まれていたというアラル海であるが、そのような状況はまったく見る影もなかった。水際を少し離れてみると貝の死骸が散乱していた。特に、浪が引く線上に死骸が集中しており、急激に湖岸線が後退していることを感じさせた。この旅の団長である専門家の石田先生によれば、一日に 20 メートルも湖岸線が後退しているところもあるとのことであった。

頃合いを見てガイドのバフチオール氏が、昼食を用意してくれた。前日に夜遅くまでかかって準備していたものが、絨毯の上に並んだ。ナンやソーセージ、果物（スイカ）などが実においしかった。特に果物は、炎天下の暑い中にもかかわらず、とても冷たく感じられた。

休息も兼ねた昼食が終わり、帰路につくことになった。往きは、アラル海を見たいという情熱で何とか辛い行程を乗り切ったが、帰りは、また長時間狭い車の中で耐えて行かなくてはならないのかと思うと憂鬱な気分になった。しかし実際は、早朝からの疲れが出て、半分夢うつつの状態であった。湖岸から約 5 時間かかり、またモイナックの町に戻ってきた。この時点で既に夜の 7 時近くになっていたが、

まだ空は明るかった。ここで、通称「船の墓場」を訪ねた。よくガイドブック等で紹介されているものの中には、ペンキが塗られているなど人の手が加えられたものが含まれているが、訪ねたところは、船が手つかずのまま残っている所であった。そのため船体は錆びつき、無惨な姿をさらしていたものがほとんどであった。船によっては、朽ち果てていたりして危険で近づけないものもあった。日没が近く、鮮明な写真を撮影できなかったことが悔やまれる。



写真3 湖面が干上がり、とり残された船

船の残骸が放置されている近くには、スラムが形成されていた。かつては、湖の底であったはずだが、人が住むまでになっていることから、干あがってからかなり長い時間が経っていることをうかがわせた。船の墓場を発つころには、日がほとんど落ちていた。大型バスに乗り換え、一路宿を取っているヌクスへ向かった。到着までには更に3時間ほどを要した。ようやく宿に着いた頃には深夜になっており、この日の夜は泥のように眠るだけだった。

聞くところによるとアラル海へは、ヘリコプターをチャーターして行くことも可能であるとのことであった。かなりの高額になるとのことであり、そこまでしてアラル海の水際まで行こうとする人は、ほとんどいないのではないだろうか。実際、陸路で大アラル（ウズベキスタン側は大アラル、カザフ側は小アラルと呼ばれている）の水際まで行った日本人の団体は初めてではないかといわれた。そう考えるとかなり貴重な体験をしたことになる。

アラル海を訪ねてから日本への帰国までは、数日を要したが、首都のタシケントへ戻るのは、飛行機を使用したため、ほんの数時間で到着してしまった。往きに延々と陸路を進んだのに比べて実にあっけなかった。当初、タシケントでは、自由行動の予定であったが、タシケントに入るその前日に爆破テロの事件が発生したため、それが出来なくなってしまった。地下鉄やトロリーバスなどの公共交通機関を使い、市民の暮らしぶりを肌で感じることを楽しみにしていたので、とても残念であった。

私たち日本人は、アラル海の縮小を地球環境問題の一つとして考えるが、現地では全く問題にされていないのが状況である。かつてウズベキスタンのある大臣が、「アラルは美しく消えていくべきである」と発言したことに象徴されるように、アラル海に注ぐアムダリア・シルダリアの水を使って作られる綿花や工業製品による収入の方がより大切であり、国の発展に寄与していると判断されているのである。

この両大河の下流の住民だけが、虐げられているように感じられた旅であった。特にモイナックの住民は、これという産業もなく、他の地域と比較してもかなり貧しい暮らしぶりであることが感じられた。このような人々の生活向上を図るため、JICA から人が派遣されており、首都タシケントはもちろん、辺境の地であるヌクスにも2名の日本人隊員が活動していた。この様な方々の活躍を祈りつつ、少しでもこの地域の住民の生活が向上することを望みながら終えた巡検であった。